

【開催レポート】アヤセ未来会議 第3回を開催しました！

作成:株式会社エンパブリック

○開催日時 令和4年12月17日（土）13：30～16：00

○会場 オーエス東京ビル5階

第3回では「取り組みたいテーマを考えてみよう」をテーマに、アヤセ未来会議に参加しているメンバーの皆さんの思いや個性を持ち寄り、これから共にアクションをおこなっていくチームを作っていました。参加者は前回と同様に、公募により選ばれた綾瀬地区とその近隣にお住まいの15名の方にご参加いただきました。

1. 導入・挨拶

最初に全体ファシリテーターの広石(株式会社エンパブリック)から第3回の会議の進め方について説明しました。



“第1回、第2回はインプット編でしたが、今回からは、話し合いがメインになります。アヤセ未来会議のテーマ「一人ひとりにできることは限られていても、自分の思い・できることを持ち寄って、誰一人取り残さない、持続可能な綾瀬をつくろう！」を合言葉に、ぜひみなさんで力を持ち寄って、このメンバーから綾瀬で新しい動きを生み出しましょう。

具体的には

- ①3～4人のグループを作り、アイデアを出す（2セット）。
- ②出てきたアイデアを共有する
- ③やってみたいアイデアに投票する
- ④活動チームを作る

という流れです。活動チームが完成したら、そのチームで第4回までにアイデアの深掘りを

したり、実現方法を考えたり、現場を訪問したりして、小さくトライをしてみましょう。”



2. 全員でチェックイン

参加者同士の認識を深めるために、再度全員で輪になって自己紹介をしました。今回は「今の気分」についても一言ずつコメントを頂きました。

一言コメントでは、「前回ゲストトークで紹介があったカフェに興味があって行ってみた」「今はお歳暮時期で仕事が忙しいけど楽しみに来た」「趣味のバンドのイベントがあるのでちょうどアドレナリンが出ていて快調」といった前向きなコメントもあり、前回欠席だったメンバーも含めて顔を合わせることができました。



3. グループトーク「アクションアイデアを考えよう！」

次に、3～4人のグループをつかって話し合いをしました（2セット）。1セット目は自由にグループを構成。2セット目は今までに話したことがない人と自主的にグループを構成しました。

グループに分かれて話し合うことで、自己紹介だけでは知り得なかった、各参加者の思いや考えを知ることができます。それは例えば、各自の得意なこと、できることの共有で

あり、さらには、それまで気づかなかった個性の発見につながります。話し合いで認識できたこれらの特性が生かされ、リンクし合い、持ち寄ったアイデアはさらに広がっていきましました。

第1回、第2回のワークショップにおける参加者同士の交流により、第3回目ではかなり緊張もほぐれていたとみられ、1セット目から活発な話し合いがおこなわれました。2セット目になるとさらに会場は熱気を帯びました。

話し合いの結果は代表者が紙に簡単にまとめ、会場の壁に張り出しました。アイデアがたくさん出て溢れかえっていたチームや、コンセプトにぴったりの言葉を見つけて盛り上がっているチームなどもあり、合わせて10個以上もアイデアが生まれました。



<グループワークでの参加者のコメント(抜粋)>

春と秋に公園でイベントするのは？
若い人たちが集まりやすい環境を作ると良いのでは。

外の人が入り込んでくれるような、地域外の人たちが魅力的に感じるイベントがいいですね。

縁日。縁って言葉がいいよね。



イベントの中では学祭が成功例だよね。大人も子どももくる。いろんな人がくるからね。

出店者が楽しんでいるのがいいですね

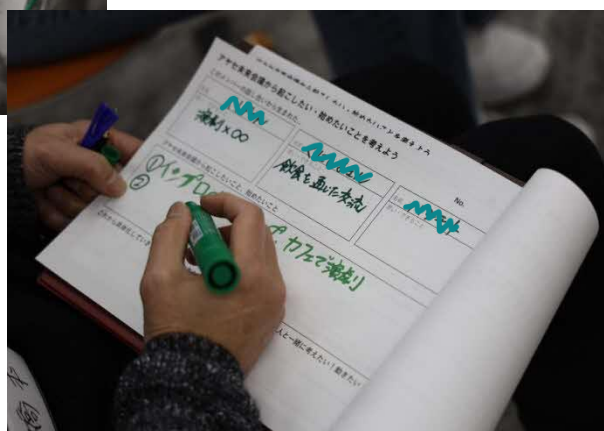
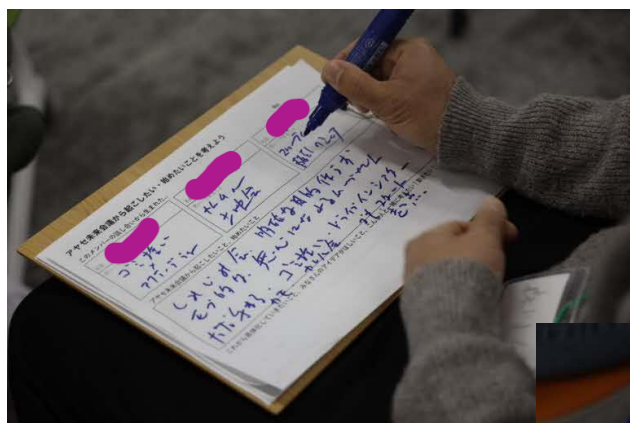


不便だから、みんなで協力しあって交流が生まれる。不便が良い。不便益、だと思う。

大人が若い人たちの価値観とか好きなものを取り入れない限り、昭和の価値観を伝えてしまうと思う。子どもの価値観を取り入れることが本当の意味での世代間交流ではないかな。おっさん頑張ってるなーと思われるのがいいのでは。

ネットでせめるなら、拡散が必要だから、タレントやユーチューバーと、イベントを絡ませると良さそう。とにかく知ってもらうことが必要。

発信力、エンタメ力が必要ですね。



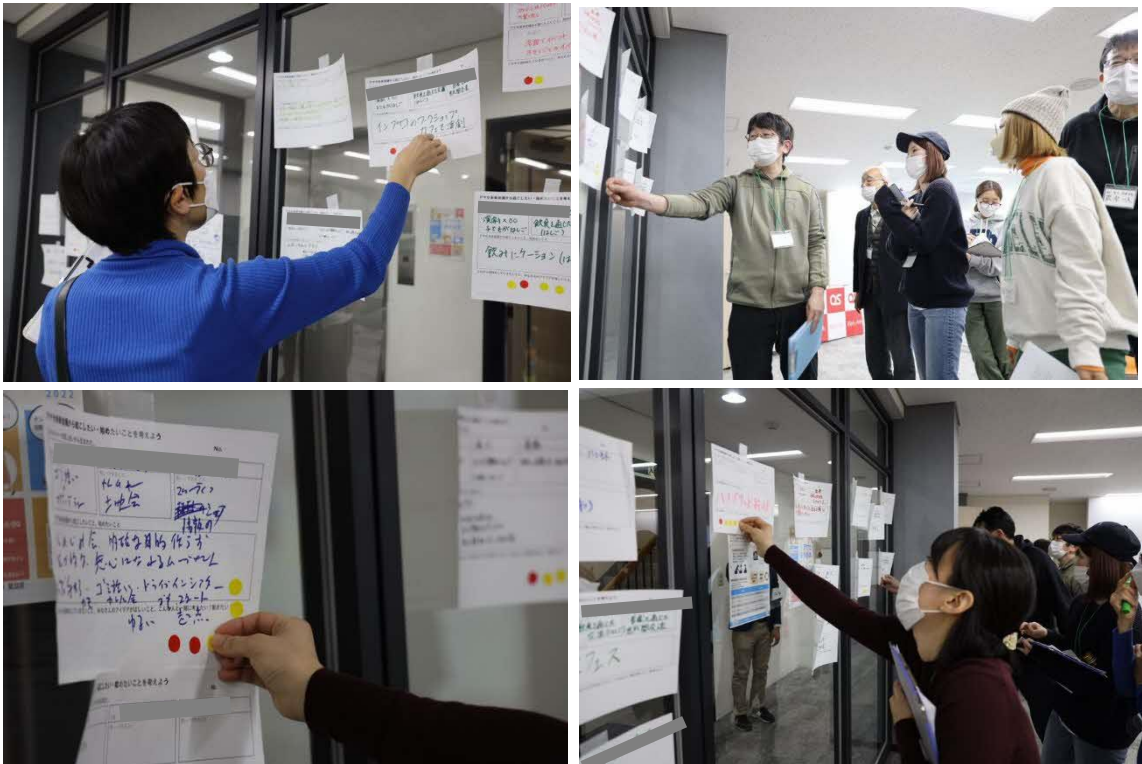
4. ワーク「アクショングループをつくろう」

話し合いをまとめた紙は壁に掲示され、一人ずつ「自分がリーダーになってもいいと思うアイデア」には赤シール、「自分が参加したいアイデア」には黄色シールを貼っていくドット投票を行いました。

また、リーダーとして動いてみたい方を中心として2～5名のチームを作りました。どのチームで活動するか悩まれた方もみられましたが、スタッフに相談したり、近くの人を誘ったりして、チームを組む方もいらっしゃいました。

<グループアイデア>

ぶっちゃけ足立／世代間交流／飲みニケーション／音楽フェス／ペットとゴミ拾い／アヤセのインプロ部／あやせの縁日／しみじみ会／あやせ街歩きマップ／あやせサンセバスチャン姉妹都市化



5. 全体共有

グループは大きく分けて5つになりました。

グループ名（仮）	メンバー （暫定）	内容（暫定）
綾瀬インプロ部	3名	インプロのワークショップ演劇
あやせの縁日	5名	ハイブリット縁日
あやせのしみじみ会	5名	コーヒー、お酒を飲んでしみじみ語る
あやせ街歩きマップ	2名	あやせフリーペーパー、体験子どもむけイベント
アヤセ未来みらいプロモーション	2名	サンセバスチャン化、プロモーション



6. グループトーク「アクション計画を考えよう」

その後の時間では、チームごとにアイデアや今後の動き方について具体的に話し合いました。また、チームごとにLINEやFacebookなどでグループを作成し、そこで自己紹介や情報交換等のやり取りも生まれていました。

第3回で生まれたアイデアはこちらです。

<綾瀬インプロ部>

インプロのワークショップ演劇。子どもたち、大人に演劇を通してコミュニケーションできるような場づくり。演劇でコミュニケーションの創出、自己表現、子どもの教育につなげたい。

<あやせの縁日>

子どもやお年寄りに新しいことを体験してもらう。定期的に公園でイベントを開催して綾瀬のブランディングにつなげる。縁日の縁はひらがなでも、馬蹄形の公園を象徴する“円”でもよい。誰がみてもわかる綾瀬の未来づくりを目指し、綾瀬という縁をつくる。他の活動グループの母体となるようなつなぐ役割ができるのが理想。

<あやせのしみじみ会>

コーヒー、お酒を飲んでしみじみ語る会。飲んだり、食べたり、しゃべったり、何をしても良い。綾瀬の街のように“ゆるく”がモットー。誰でも立ち寄れる空間の提供。網の目のように人が繋がって行って、誰かを介して必ず誰かに繋がるようなビジョン。空気のように自然に存在し、継続し、将来的には増殖していろんなところにできたら良い。

<あやせ街歩きマップ>

綾瀬の魅力的なお店の情報を集めて発信。綾瀬まちあるきマップをいきなり作るのではなく、インスタにハッシュタグをつけて投稿してもらう。「#ベット可」、「#ベビーカー可」など。まずは、投稿しよう、というイベントをお店の人とつくるのも良いと思っている。

<アヤセ未来みらいプロモーション（あやプロ）>

アヤセ未来会議のプロモーション課として活動する。綾瀬で起こっている良いこと・ものがもっと外に伝わっていくような打ち出し方を考えてみたい。まずはInstagramでアカウントを作って、アツい人たちの活動を追っていくという活動をやってみたい。



7. ふりかえりコメント（アンケート結果）

今回は特に参加者の方々の笑顔が多く見られ、最後には「わくわくしてきた」「面白い」「楽しい！」といった言葉も聞かれました。また、グループ LINE でメンバーの自己紹介を掲載するために、顔出し可能な方に一眼レフカメラで写真撮影する方もおられ、会場は大いに盛り上がりました。アンケートからは、このような活気のある話し合いの様子が反映された感想が聞かれました。

《参加者の声》

- ・個々人と具体的に話を進めることができて、今までで一番楽しかった。
- ・話し合いが形になりそう。
- ・何かいろんなことが進みそうで「ワクワク」してきました！！
- ・他のグループとも協力していきたい。
- ・具体的なプランやイメージなどができあがってきて面白かったです。

○第3回のまとめ

第3回はグループワークを主に実施しました。

「一人ひとりにできることは限られていても、自分の思い・できることを持ち寄って、誰一人取り残さない、持続可能な綾瀬をつくろう！」の言葉通り、熱い思いを語る人、面白い体験を共有する人、課題を挙げる人、しっかり聞く人、豊富な経験を還元する人、新鮮な感性を提供する人、具体的な対策を練る人・・・など会場ではすべての人が何かしらの役割を持って、話し合いが進んでいきました。

話し合いによって出されたアイデアは、具体的なものから抽象的なもの、夢に至るまで幅広く、参加者は自分の得意とするアイデアの階層に自然に加わって発言し、アイデアを発展させていきました。

また、＜綾瀬インプロ部＞×＜あやせ街歩きマップ＞など、アクション同士を組み合わせ、「ワークショップ演劇をする」×「飲み（食事）に出かける」という別のアイデアに広げたり、＜あやせの縁日＞や＜しみじみ会＞では、これまでに紹介されたコーヒーショップや駄菓子屋に出店依頼する案が出されたりなど、アイデア同士の新しい繋がりも生まれました。

このような開かれた場所でいろんな人ができること・やりたいことを持ち寄り、共有していくことで、住民の手で街にある困難やハードル、今までできなかったことに挑戦することができると体感できるような第3回でした。